

やってきたのは男の娘

【購入特典】書き下ろし SS

バスタイム

丸いバスタブを満たす湯に、ゆらゆらと花びらが浮かんでいる。
ふたりで選んだ生花の入浴剤は、とても良い香り。

アプリに指定されたこのラブホテルは、隅々まであなたたちを歓迎してくれた。
バスルームの豪華さと、充実したアメニティにはしゃいで、洗いっこして。今ようやく、
湯船に落ち着いたところ。

「照明何色にする？　ピンクかわいいね、紫だとえっち。わ、赤はちょっとホラーだねえ」

彼はあなたの隣で、バスタブに付属しているライトアップのボタンを押しては、湯の色が
変わるのをおもしろがっている。

「え、レインボーとか。これ何用？」

いろんな色の光がランダムに飛び交う様子に、ふたりで思わず笑いあう。

「やっぱピンクにしとこ。お花の色にも合うし、いい感じ」

入浴中なのでもちろん全裸。メイクも落として、お互いに生まれたままの姿ではあるのだ
けれど。

かわいいものを全部はぎとってしまっても、彼はとてもかわいい。長い髪をくるりと頭の上
でまとめれば、うなじを伝う濡れた後れ毛が、やたらと色っぽさを増している。

花びらを手のひらにすくって眺めてる姿など、ほんとに、ほんとの、女の子みたい。

こうして一緒に湯船につかっていると、彼の性別を忘れそうになる。

でも、彼は、確実に「雄」なのだ。あなたの体はそれを忘れることなどできやしない。

彼に見とれていたら、ぱしゃりと湯がはねて、顔をのぞきこまれた。

なんだか頭の中までのぞきこまれたような気になって、あなたはつい、照れ笑い。

「ね、あっちの壁ってガラスになってるんだね。ほら、部屋。ベッド見えてる」

バスルームの壁はガラスになっていて、寝室が見えてしまう仕組み。曇ったガラスの向こうに、天蓋付きのベッドの形が、ぼんやりとうかがえる。

「さっきまであのベッドで、俺たち、えっちなことしてたんだよねえ」

湯の中で、彼の手があなたの太ももをなでた。その意味に、あなたはひとつ、息を吐く。彼は気づいているのだろう。あなたの体がまだ、欲情をくすぶらせていることに。そしてあなたも気づいている。彼の股間のものが、ずっと昂ったままなことを。

「今日って時間、まだ、大丈夫？ アプリの質問にはなかったよね。何回えっちしたいですか、とか」

そういえば、アプリに指定されたのは、待ち合わせの時刻だけ。終わりの時間はなかったことを、あなたはのぼせる頭で思い出す。

予定がないことを伝えたら、彼は顔をほころばせた。

「俺も大丈夫。ね、このままここで、していい？」

何をするのかなんて、聞かなくてもわかる。彼になでられ、さり気なく脚を開くように誘導され。そして今はその指先が、あなたの秘部を刺激している。

「おまんこ。泡いっぱいつけて洗ってるときから、ずっと濡れてたよね？」

湯の中で弄られているのに、ぬるぬるとした感触が消えない。あなたの体は彼に触れられることに悦びを隠せない。

「君が俺のちんこ洗ってくれるのも、たまらなくて。途中何回か入れたくなかったの、我慢したんだけどねえ」

今愛撫されているのは、あなたの方なのに。あなたに触れながら、彼の息も荒くなっている。

きゅ、と、クリトリスをやさしく摘まれて、喘いだあなたに、彼は甘く囁く。

「ここで、つながる？」

あなたは誘われるままに、彼のひざの上に体を移動させた。向き合えば、にっこり笑って彼はあなたに指示を出す。

「そのまま座って。ね、ちんこの上」

うつむくと、水面の花びらごしに、彼の昂った男性器が見える。ピンクの照明のせいなのか、雄々しくて立派なのに、これだってかわいく思えてしまう。

あなたはその位置を確かめながら、ゆっくりと腰を下ろした。

ぬるついた肉が、彼の硬さに触れる。それだけで、お互いに声を上げてしまった。

バスルームに反響した喘ぎ声に、ふたりでくすくすと笑う。

「俺も君も、敏感すぎ！」

だってこんなに気持ちがいいことを、我慢するのは難しい。あなたは彼と性器をつなぎ、挿入するひとときを楽しむ。

ずっと欲しかった部分が満たされる感覚に、ふたり、うっとりと溶け合った。

「苦しくない？」

少し眉を寄せて彼は問い、あなたの額に手を触れた。

額に張り付いた髪を一束、指でなぞられ、あなたは大丈夫とうなずいて見せる。

彼はほっとした様子で、ぎゅっとあなたを抱き寄せ、首を伝う水滴を舐めた。あなたがぴくぴくと肩を震わせると、あなたの中の彼も震える。

「つながるの、気持ちいいね、泣きそう」

あなたも同じ気持ちだと伝えたくて、真似して彼の首に口づける。その途端、わ、と驚く声を上げ、彼は体を動かした。湯が波打ち、彼が上目遣いにあなたを見る。

どうやらあなたの行動は、彼を相当煽るものだったらしい。

「今それやばい、も一、ゆっくりのんびり、つながろーって、思ってたのに……」

拗ねた口調とはうらはらに、あなたに与えられるのは満面の笑みと、やさしいキス。

唇を重ねるうちに、どちらからともなく舌を絡ませ、むさぼるようなキスになる。同時に湯の中では、つながった部分を執拗に擦り合う。

「かわいすぎて、我慢むり」

そんなふうに関を尖らせる彼に、かわいすぎるのはどっち、と言いたいけど言えないのは。ばしゃばしゃとはねる水音が示す行為の激しさのせい。

彼の腕は細いのに、うっすらとついた筋肉は、あなたとはつくりが違ふ。その腕に支えられ密着していると、とても安心する。

彼はかわいくても、確かに雄。その証拠で奥まで存分に突かれ、あなたに快感が押し寄せる。

逃げようのない快楽に捕らわれ、思わず背をそらしたあなたの胸に、ひとひら。花びらが張り付いているのを、彼は目ざとく見つけた。

「おっばいに花びら、えっちだね」

そして次の瞬間、彼はその花びらを唇に挟み、えへへと目を細める。

目の前の彼の言葉と、表情と、行動と。そのすべてがあなたをたまらない気持ちにさせる。彼は啜えた花びらを、そっと湯に戻すと、あなたの胸にキスをした。

「こんなに乳首勃っちゃってるから、お花、引っ掛かったんだねえ。でも、だめ。君の乳首も俺のだから」

先端を舐められ、快感があふれる。彼に伝える暇もなく、あなたは絶頂する。

「あは。今、気持ちよくなってくれてる。俺のちんこ気持ちいいんだねえ、すごいうれしい。君がイクの、俺も気持ちいいから、いっぱいイって」

つながった部分が熱い。無意識に、あなたは彼のものを、さらに強く抱きしめた。

どうやったらいっぱいイけるのか、なんてわからないけど。あなたは彼にしがみつき、こみ上げる気持ちを口に出す。

——好き。大好き。

快感も、この行為も、そして彼のことも。

あなたの言葉が彼に伝わると同時に、下から突き上げる速度が増した。

「俺も好き……、っ、あー、もう出したいかも。……かも、じゃなくて、……っ、出ちゃう……っ」

ふたりの声が絡み合って、バスルームに響く。

あなたの中を熱いものが満たす。注がれた精を感じながら、あなたの体は再び果てた。

快感と興奮は、行為が終われば去ってゆくけど、生まれた愛おしさは消えないまま。

むしろ、どんどん増えてしまう。

「んん、離れたくない……」

彼はつながったまま、あなたにたくさんキスをした。激しく動いたせいで、まとめた髪がほどけてしまっている。湯の中で彼の髪が広がって、花びらがまとわりついていた。あなたがそれに手を伸ばしたときに、耳に届く、彼の言葉。

「もう、この先は。どうするかは、俺たちが決めちゃっていいんだよね。アプリに頼らなくても」

アプリには決められなかった終わりの時間。

これから先のことは、ふたりが決めること。

あなたが彼と出会えたのは、アプリのおかげ。

これは、アプリに頼った、手軽な恋だ。一瞬で消えてなくなっても、そのときが楽しければいい恋のはずだった。

だけどもう、彼に出会ってつながって、どうしようもなく惜しくなる。

「ね。また会お。君といっぱいしたいことある。えっちだけじゃなくて、ほかにもいっぱい」

いつのまにか湯の中で、つながれた手。絡められた小指に、力が入る。

今、彼もあなたも、同じことを考えているはず。

この恋を手放すことは、とても難しい。